

## 博士論文審査結果報告書

星谷美恵子

grâce と écriture の間に

—『失われた時を求めて』における父親像—

(2016年、230頁)

<概要> 本論文で星谷氏は文学作品の社会的、歴史的次元を考察するのではなく、一般の文学研究ではしばしば無視される作品の「エクリチュール」（英語では **writing**）に焦点を当て、作品を生成論的に考察するという立場を取っている。

エクリチュールというフランス語には「書く行為」という意味と「痕跡としての書かれたもの」という意味があるが、一般に言語のもつ二重性は文学にとって不可欠であるという認識から出発し、現代精神分析の知見を考慮に入れつつ、星谷氏はマルセル・プルーストがその生涯にわたって書き続けた大作『失われた時を求めて』（以下、『失われた時』と略記）の根本構造を探ろうとする。その際、鍵となるのは、プルーストが小説の最終稿で作品の表面から痕跡を消そうと努めたユダヤ性の問題、および「父」の問題である。これまでのプルースト研究でユダヤ性や、父をテーマとしているものは数多くあるが、本論文はフィクションを起動させる原動力としての言語、つまりエクリチュールにそれらのテーマを関連付けている点に特徴がある。

星谷氏は序論で、プルーストの現実の父親（アドリアン・プルースト）についてはこれまで種々の研究書が出ているが、小説における「語り手」の父親と現実の父をしばしば混同していると指摘し、両者をはっきり区別すべきだと主張する。そして第2章では『失われた時』第1巻に登場するいわゆる「就寝劇」のシーンにおける父親の役割を分析し、就寝前に母親にキスしてもらおうとする主人公のわがまを許さず、母親から主人公を引き離そうとした父親が突然考えを変え、母親が主人公の部屋に残るのを許してしまうという「優柔不断」な態度が語り手にとって大きなトラウマとなるとともに、文学への最初の関わりとなっていく部分が分析される。エクリチュールという点から見ればこのシーンが作品の冒頭に置かれたのは偶然ではない。というのもそれまで家族において正常に機能していた父親の権威がふしぎな形で崩壊する瞬間に語り手は立ち会い、通常の間とは異なる人生を歩むことを強いられ、そこで文学あるいはフィクションの世界と初めて出会うからである。精神分析はフロイト以来、父の機能は母親の支配から

こどもを切り離すことにあると考えているし、小説中でも子供自身そのように父親が振る舞うことを密かに期待しているにもかかわらず、父は自分自身が下した判断を自ら覆す。このような父の両義的な態度は実際、プルーストに深い傷痕を生涯にわたって残したが、しかし同時に、この体験なしには文学作品を書くことは不可能であったことを星谷氏は示している。プルーストの場合、このような父の優柔不断さの結果として、母親が寝床で読んでくれたジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』が『失われた時』の最終巻で「途方もない (extraordinaire)」喜びとともに回想されるように、文学作品を書くことへの巨大な推進力となり、『失われた時』のさまざまなテーマ（例えばマルタンヴィルの鐘楼、プチット・マドレーヌの体験、父の死に際しての「途方もない」体験、ヴェニスでの体験など）だけでなく、常にジグザクな道をたどるプルーストの文体の出発点となっていることを星谷氏は実証的に示している。ちなみに第4章の4節と5節において星谷氏はマルト・ロベールなどを参照しながら、なぜプルーストが多くの変遷の後で、数あるサンドの小説の中でも特に『フランソワ・ル・シャンピ』を最終的に選んだかを複数の理由を挙げて説得的に説明している。

モーリス・ブランショに「*L'arrêt de mort*」というタイトルの小説がある。このタイトルは「死刑宣告」と「死の停止」という正反対の意味を同時に表しているが、星谷氏はプルーストが描き出している体験がそれと相似した事態だと分析する。語り手にとって、父によって下された死の宣告がほとんど直ちに撤回されることで死は延期され、それゆえ終わりなく続く「死にゆき *le mourir*」の空間が出現する。星谷氏はこの過程をプルースト自身の描写を辿りながら考察したのち、さらにこの体験を、「創世記」にあらわれるアブラハムによる最愛の息子イサクの犠牲のシーンへと関係づける。実際プルーストは「就寝劇」の描写においてこのシーンを参照しているだけではない。言語のうえでもプルーストはアブラハムの仕草を形容するにあたって、*L'arrêt de mort*（死の宣告＝死の停止）のように、対立した観念を同じ語彙によって表現していると星谷氏は *Juliette Hassine* の先行論文を参照しながら述べている〔動詞「*se départir de*」（「～から離れる」＝「～の方へと向かう」）の二重性〕。また、このシーンに関連して星谷氏は、第3章第3節で、プルーストがこのシーンでの父の「仕草」を描写するなかで挙げているイタリアの画家ベノッツォ・ゴッソーリによるアブラハムの生涯をテーマとするフレスコ画を基にした版画がこれまで失われたものと考えられていたのに対し、ラディオーニ父子による着色版画が現存しているのを発見し、「就寝劇」における父の「仕草」がどのようなものだったかについて、検討に値する仮説を提出している。

また興味深いのは、第3章「父親の絶対性」で述べられている「権威」あるいは「主

権 (souveraineté)」についての考察である。「権威」あるいは「主権」は法を制定する権能であるだけでなく、法を無化する権能でもある。この点において父の問題とユダヤ性の問題が結びつくことになる。というのも、「創世記」に描かれているように、ユダヤ教の神は自己の決定を覆す神だからである。アダムとイブで始まる人類創造は一旦無化され、ノアを残してすべて神自身の手で滅ぼされるし、アブラハムによるイサクの犠牲も神自身によって中断される。このように破壊と創造が一致するような一点を巡って、語り手は最初、それを恐ろしいトラウマ的な出来事と感ずるのだが、結局それは人間の思考を超えた恩寵 (grâce) であり、フィクション、あるいは文学 (芸術) 作品はそれなしには成り立たないことにますます自覚的になっていく。これと関連して、ここでは詳述しないが、プルーストの短文「親殺しの孝心」には権威あるプレイアード版でも本文から削除された重要な一節があるという指摘も興味深い。こうして過去も未来も、すべての「時間」はものを書いている「いま」という一点に収斂していく。星谷氏は『失われた時』を詳細に読むことによって、そのような道筋を明らかにしている。

<総評>

このように星谷氏の論文はコンブレ I における「就寝劇」を『失われた時を求めて』全体の構造の出発点として、作品に現れるさまざまなエピソードを統一的に捉える視点を提供している。方法は斬新であり、分析の方向性も単にプルーストだけでなく、一般に文学とは何かを考える上で有効である。ただこの論文は出発点であり、今後さらに分析を緻密かつ説得的にしていく必要があると思われる。またゴッソーリの絵に関する考証も興味深いが曖昧な点が残りと、先行研究も参照しつつ深める必要があるだろう。しかしプルーストの大作を統一的に理解する視点を提示しているメリットは大きく、高い評価に値する。以上を考慮した結果、審査委員一同は本論文が博士論文として合格と判断する次第である。